

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立高郷小学校)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

「気づき」を促す 関わり方

無自覚でやっていることがあります。それらの価値に気づくと言動が変容し、自覚的なものの方ができるようになります。

今回は「気づき」を促す関わり方がテーマです。

1 やるべきことをやっていないケース

夏の暑い朝。教室に足を踏み入れたとたん、ムツとした暑さを感じます。窓が閉まっているからです。

こんな教室で子どもたちはお喋りを楽しんでいます。「おはよう」と声をかけると、教室のよごんだ空気を吹き飛ばすような爽やかな挨拶が返ってきます。

Q1 さあ、子どもたちにどんな言葉をかけますか。

- ① 窓を開けて。
- ② 暑いね。
- ③ 暑くないの？
- ④ なんで窓を開けないの！

①は、子どもに考える機会を与えないばかりか、「叱られた」と思わせませす。先生に言われたことをやる、という受身の行為を促すだけです。おそらく、先生は「朝教室に入ったら窓を開けることになっているでしょう！」と詰問調の言葉をかけることになるでしょう。④も同様です。③は一見子どもの気持ちを尊重しているように聞こえますが、迎合です。ムツとする暑さを感じる主体は担任です。子どもたちは感じていません。だから、窓を開けないのです。そんな子どもたちに「暑くないの？」と問えば、「うん、暑くない」と答えるに決まっています。

私なら②の「暑いね」にします。すると子どもは「先生は暑いんだ」と考えます。気が利く子どもなら、更に「何で暑いのだろう」と推測します。

「暑いね」と声をかけ、ベランダと廊下の窓に視線を移します。ひとりの子どもがそれに気づき、視線を往復させます。私は「そうだよ。窓を開けて空気の通りをよくすると涼しくなるよ」という気持ちを込めて軽く頷きます。

彼は、お喋りを止めて、ベランダの窓を開けようとしています。それを目で制します。「廊下の窓を開けてください」とアイコンタクトを取ります。彼はさっと席を離れ、窓を開けます。そして、出入り口に立っている私の前を通り過ぎて教室に戻ろうとします。そんな彼に囁くように声をかけます。

「ありがとう。よく気づいたね。私は『暑いね』とは言ったけど、窓を開けなさいとは言っていないのに」

すると、彼は誇らしげに答えます。「先生の『暑いね』を聞いて、教室の暑さに気づいたんだ。そうしたら窓が開いていなかった」そんなやり取りをしていると、他の男子がベランダの窓に向かいます。ベランダと廊下の両方の窓を開けなければ風は教室を抜けていきません。それに気づいたのです。

初めに気づいた子どもをアイコンタクトで制したのは、廊下の窓を開ければ、ベランダもそうすると信じたからです。

両方の窓が開け放たれると、涼しい風がサツと教室に入ってきます。一瞬にして教室の空気が変わります。

ベランダの窓を開けた子どもにも声をかけます。

「ありがとう。お陰で気持ちいい風が入ってきたよ。これで教室が涼しくなるね」

彼はにっこり微笑みます。

換気のために窓を開けることは常識です。教室でお喋りをしていた子どもたちは「やるべきことをやっていなかった」のです。

大切なのは子どもへの気づきを促すことです。教師は行動をほめるだけでなく「窓を開けると涼しくなるね」と理由や効果を口にするべきです。

2 やるべきことをやっているケース

算数の時間、筆算では定規を使い、一行空けて書くように指導しています。

練習問題を解いた子どもがノートを持ってきます。最初の子どもは全問正解ではありません。「定規・一行空き」ができていません。

2番目に並んだ子どもがソロソロとノートを出します。全問正解です。安堵、笑顔に変わります。彼は指示通りにしていました。

Q2 さあ、全問正解の子どもにどんな言葉をかけますか。

- ① おめでとう。
- ② 定規を使ったんだね。
- ③ すっきりとして、見やすいね。

①は「できればいい」と推奨しているようなものです。ほめるべきは、出来・不出来ではなく丁寧さです。

②は教師の指示に従っただけです。教師は自分の言う通りに子どもが行動したという満足感があるでしょう。子どもにとっては言われた通りにしたからです。ほめられたというよ

教師の腕前が試される、学級経営のひとくふう。
ベテラン先生によるケーススタディです。
こんな時、あなたならどうしますか？

りは当たり前前のことをしただけ、叱られなかったという感じでしょう。

それに対して③の「すっきり」として、見やすい」は教師が感じたことです。

「定規・一行空き」を実践すれば丁寧さが増します。その結果、ケアレスミスを防ぎます。行動はあくまでも方法であって、その目的「すっきり」のメリットを強調します。

「定規を使う」と正確に計算ができるね。また、一行空けるから、とても見やすいね。頭の中が整理されている証拠だよ」子どものノートに大きな花丸をつけます。

子どもは「行動」だけに目が向きます。教師の指示通りのことをしただけで、メリットを自覚してそうしたわけではありません。それを全問正解という成果を通して感じさせます。自覚的に行えるようになります。

3 ちゃんとやっているつもりケース

庭掃除の子どもが葉や枝を集め、ゴミ袋に捨てています。ゴミ袋に目を転じると、土がこっそり入っています。

それを持つとズシンと重さを感じます。

Q3 さあ、あなたはどんな言葉をかけますか。

- ① 土も捨てているよ。
- ② ちゃんとゴミだけを入れなさい。
- ③ ゴミ袋が重いね。

①のように言っても、子どもたちは「先生は何を言っているのだろう」と他人事に捉えま

す。自分たちはちゃんとゴミを捨てていると確信しているのですから、まさか先生が自分たちに語りかけているとは思いません。先生を「無視」しかねません。

②は、「なんで叱るの」と先生への不信感を招きます。ゴミを集めた時にたまたま土が混じってしまっただけです。それは仕方ないことだと思っています。

私なら③です。「ゴミ袋が重いね」とゴミ袋を重そうに持ち上げます。子どもたちはまじめに掃除をしています。集めたゴミを全部ゴミ袋に入れようとするから勢い余って土ごと掃いたのでしょうか。全くの善意です。

ところが、ゴミ袋には葉や枝よりも土の方が多く集まっています。それを持って「重いね」と驚きます。私の声に子どもたちは掃除の手を休めます。

「なんで重いのかな？ 葉や枝しか入っていないはずなのに」

子どもたちにもゴミ袋を持たせませす。

「本当だ。重い。土の方が多い」

どうやら気づいたようです。ゴミ袋をひっくり返します。すると、土の山の上に枝や葉がちよこんと乗っています。熊手でそれらをやさしく取り出します。さらに、土の山を崩すと、葉や枝が出てきます。

土と葉や枝の選別ができました。「ゴミ」をゴミ袋に戻して、持ち上げてみます。思わず、「軽い！」と叫んでしまいました。子どもたちにも持たせると「本当だ」「軽い、軽い」「さっきの重さは土だったんだ」と感嘆の声が上がります。

翌日から庭掃除の子どもたちの様子が一変します。そっとそっとなせるようにゴミを集めています。

* * * * *

気づきのもととは、感じることです。すると、どうしてそう感じるのかを考えるようになります。行動するための選択・決断へと発展します。

「感じる→思考→選択→決断→行動」という「気づき」の流れが一気に走ります。

子どもたちに「気づき」を促すには、大人が「窓を開けると涼しいね」「定規を使うとケアレスミスを防げるね」と口にする事です。「A」とするとBになるね」「AだとBになるね」と言い続けることです。

「ゴミが落ちていない教室は気持ちがいいね」と、もともとあるべき状態に気づかせれば、ゴミが気になり、手が伸びます。

